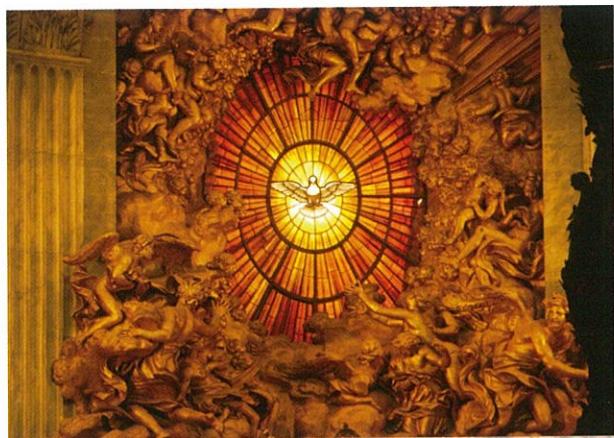


セント・ルカ産婦人科20周年によせて



サン・ピエトロ大聖堂(バチカン市国)

セント・ルカ産婦人科 20周年によせて



京都大学 名誉教授
NPO 法人生殖再生医学アカデミア 理事長
森 崇英

この度、セント・ルカ産婦人科におかれましては、ご開院20周年を迎えるに心からお慶び申し上げます。そして20周年記念誌発刊に当たり、お祝詞を寄稿させて頂く機会を賜わり大変光栄に存じます。

喜んで寄稿させて頂きますが、先生とは長い親交の足跡がありますので、若干長くなることを始めにお許し下さい。

宇津宮先生と私とのそもそもその出会いは、私の記憶を辿るとお互いに若き時代の文献交流に始まったように思います。先生が九州大の温泉治療医学研究所にご在職の頃でした。私が学位請求論文として纏めた3篇の論文の1編が先生の目に留まり別冊請求を頂いたことが発端でした。未熟な論文を読んで貰える人が居るのに大変感激しましたが、Edwards博士と私との最初の交流も実は彼からの文献請求がありました。今から思うと何か宿命的な出会いであったような気がします。

その後は学園紛争やら外国留学やらのため交信は久しく途絶えておりました。本邦に体外受精が導入されてから大分市にIVFの拠点センターとして斯界にデビューされたことは仄聞しておりましたが、2003年8月に第10回セント・ルカセミナーにご招待頂いたことが交友再開の切掛けとなったのです。当時は大分大学の宮川勇生名誉教授がまだ現役でおられ、湯布院と別府の豪華な温泉宿で家内共々大歓待を受けたことを懐かしく想い出しております。以来シリーズ的に第17回(2010年)まで毎年お声を掛けて頂き、海外の著名な専門家も招かれるこのセミナーのレギュラー・メンバーみたいなお心遣いに対し、ここに改めて感謝致します。ある年のセミナー時に少々体調を崩した時には、院長先生が自ら抗生素とビタミン剤入りの点滴をして頂いたりして、恐縮したこ

とも想い出します。斯界の先端を走る講師が招かれているこのルカセミナーは内容的にはARTに関する最新のトピックが選ばれているので、院内職員だけでなく院外からの多くの出席者が目を輝かせて聴講し熱心な討論に参加していました。私はこうした真剣なセミナーそのものが国内外の学会における当施設からの多くの発表の原動力となっているのではと強い印象を持っています。大分市津守の地でご開院された翌年(1994年)から開講されたこのセミナーには、国内外の専門家が広く招待されるので、職員の研修と資質の向上を図っておられます。私も2003年から2010年まで続けて講演のご依頼を受け、その都度啓発される処大でありました。ルカセミナーにはクリニック内だけでなく外部の専門家も聴講に来られ、特に大分大学産婦人科の宮川名誉教授、樋原教授など多数の方が常連として参加され、毎回活気に溢れています。なお、ここで附言させて頂きますが、毎回セミナーの前夜祭が行われます。奥様もご出席されて大分産の珍味は忘れ難く、ご馳走を囲んでとても楽しい歓談の機会を持てたことは心安らぐ一時でした。

さてここで宇津宮先生の人間像に迫ってみたいと思います。臨床・研究を問わず飽くなき貪欲さを以て、直線的である曲線的であれ、目標に向かって挑戦されます。それが私の目には患者至上主義として映るのですが、医師としての人間像は先生のどの様な人生哲学から来ているのか少なからず興味を持っていました。ご招待頂いたある宴席だったでしょうか、先生がトライアスロン出場中に事故に遭われ(35歳:1986年)医師から再起不能と宣告される重傷を負われた事があったとお話し頂きました。その時、ご自分で死を覚悟しておられた由です。生死の狭間から先生を復活させたのはキリスト教に対する深い信仰と帰依であったとお伺いしております。

この祝辞を書かせて頂くに当たり、失礼ながら先生に3



つの設問を発しました。

第一に診療モットーは「生まれてくる子どもの幸せのために世界一の生殖医療を」、第二にお気に入りの文言は「求めよさらば与えられん、門をたたけさらば開かれん（聖書のルカ福音書11章9節）」、そして尊敬する人物は、差別解放運動の指導者「Martin Luther King, Jr 尊師」と体外受精法の開発者「Robert Geoffrey Edwards 博士（2010年ノーベル医学生理学賞受賞者）」とのお答えを頂きました。

まさしく医師として、そして人間としての先生の魂の根源を垣間見た感が致しました。40年の長きに亘り、知る人ぞ知る先生の「生殖医療に対する執念を感じさせる」活発な軌跡がこの様な精神的支柱の下に展開されて来たものと、初めて私には理解と納得が得られました。

先生の診療モットーにも端的に表現されている通り、現場重視の患者第一主義の具体例として、ここに二つの社会的貢献を簡潔にご紹介しておきます。一つは関係者の間では既に有名なエピソードとなっている生殖補助医療費の一部国庫負担制度の創設に対する並々ならぬご尽力です。大分出身の国会議員を動かし「特定不妊治療費助成事業」として厚生労働省が2004年度に初めて少子化対策費として受療者に一定額の給付を実施することが決定されました。これが起爆剤となって助成制度が全国に拡大・定着することとなったのです。高額の費用を要するART医療には保険適応はなく、少子高齢化に益々拍車が掛かる人口動態は日本の将来に大きな影を落としています。国策として悪循環を断ち切らないと日本の将来はありません。こんな難問と取り組んだ市井の一開業医の運動が国策を動かすに至った事例は極めて例外的でありましょう。先生は多忙を極める診療の傍ら粘り強く地道な運動を続けられ、最終的に目標を達成されたのです。常人には出来ることではありません。

もう一つの事例は国立成育医療センター総長との読売新聞紙上での論争です。2004年3月同センター長が読売新聞・論壇に寄稿し、不妊治療によって未熟児・異常児が増え新生児集中治療室の不足を指摘された上、不妊にはもともと固有の原因因子が内在するので治療対象にはなり得ないといった趣旨がありました。これに対し宇津宮院長は即座に反論を寄稿されたのです。曰く、不妊の原因となり得る社会環境の激変があること、統計上異常児の増加はないこと、そして何よりも不妊症形質は遺伝するので治療の対象外とすべしとは恐るべき優性思想に通ずるのではないか等の反駁論を投稿されたのです。本来は日本産科婦人科学会が明確な見解を逸早く表明すべき処ですが、宇津宮院長の反論がなければ一般社会の不妊治療に対する誤解や偏見が増幅する一方ではなかつたかと、先生の英断と勇気ある発言は高く評価されました。生殖医療の大きな節目に専門の立場から社会に対して説得力ある解説と主張を加えることは、プロとしての我々の責務と知りながら、ここぞという時に発言出来る人間の存在は社会的意味を持っていることを先生は身を以て示されたと私は感じたのです。

次に、セント・ルカ産婦人科における臨床研究や学術活動について私の感想を述べます。1988年10月にセント・ルカ生殖医療研究所を開設され本格的に臨床研究を推進される体制を用意された様です。研究内容のレベルも高く、生殖医学関連の国際学会発表だけでなく専門の国際誌にも発表・掲載されているのを見掛けしました。私は嘗て幾つかの国際誌の編集委員やレフェリーを務めていましたが、日本からの投稿があると矢張り嬉しい気分になります。私も若干お手伝いさせて頂き、Reproductive BioMedicine Online (Editor-in-chief: RG Edwards) に2篇ほど掲載されました。先生の当該分野における学術業績には目を見張るものがあります



が、生殖医療で特に重要な出生児の追跡調査報告もその一つです。あまり皆様方ご存じないのではと思うのでここに改めてご紹介しておきます。平成元年に日本産科婦人科学会に生殖医学の登録委員会が設置され、私が初代委員長を仰せつかりました。当時は実施例数／出生児数も少なかったのですが、その後爆発的に実施例数が増えるにつれ児の安全性の追跡調査が必要になりました。私の4年間の任期の最終年に男女児合わせて1,168児の生後12ヶ月までの追跡調査をやっとの思いで間に合わすことが出来たものの、その後ずっと途絶えていました。これでは医療としては片手落ちになるだけでなく、諸外国からも実施件数の多いことばかりが喧伝される割に出生児の予後調査が不備であるとの厳しい指摘があったのです。そこで当時の日本受精着床学会の理事長提案により、理事会内に出生児の実態調査委員会が設置され、私が総括責任者として、宇津宮先生が身体発育・集計担当として委員会のメンバーに指名されました。顧問を務めて貰った小児科医の意見を受け5歳児が心身発達の節目になるとのことで5年前に遡って調査することにしました。遡及的追跡調査ということで全国44登録施設から記録を収集したもののその分析に難渋したのです。その時委員としてだけでなく集計と解析に絶大なご協力をいただいたのが宇津宮院長と工藤由香・情報処理室長でありました。皆様ご存知の如くセント・ルカでは独自の統計処理ソフト「SarahBase」を開発されていました。そこで宇津宮先生に協力をお願いした処即座にご快諾を頂き、直接担当者の工藤由香様の懸命なご努力により追跡調査が可能となりました^(注)。その統計でエピジェネシス異常である1例のPrader-Willi症候群が発見されたことは、IVFの方法論に改めて重大な警告となったのですが、宇津宮先生の診療モットーである「生まれてくる子どもの幸せのために世界一の生殖医療を」が、ここでも如何なく發揮されることになります。セント・ルカ産

婦人科のソフトと人的なご協力なしには発見が遅れていたに違いないと思うとこの事業の医療社会的意味は後にになって厚労省や日産婦学会を動かすことになりました。

このほか先生が先導して来られたセント・ルカの学術活動は私の知る範囲でも子宮内膜症、胚盤胞培養、同調胚培養法、染色体異常、エピジェネシス異常、生殖補助医療カウンセリング、その他実に多彩で広範に亘っており枚挙に暇がない程です。学会活動にしても既に幾つかのART関連学会を開催されましたが、本年3月には新築移転後の多忙を極める中、私が理事長を務める生殖再生医学会の第7回学術集会長としての大任を見事果たして頂きました。改めてこの紙面をお借りして深謝申し上げます。

最後に、宇津宮先生の半生を知るもの一人として、医師そして人間としてその生き様を物語る言葉を探すとすれば、「凄ましさ」「真摯さ」そして「温かさ」の三語彙を想起させます。日本における体外受精は導入以来、基盤形成期、発展期、そして現在は次の飛躍への潜伏期に入っている感がしますが、先生はこれらの全時期を通して多大な貢献をされてきました。セント・ルカ産婦人科の職員の皆様はこの先生の下に結集し、何時も変わらぬ快活さと仕事に対する旺盛な意欲が感じられ、接していく実に好感を覚えます。矢張り院長先生や奥様のお人柄の反映と常日頃から厚い親近感を抱いています。昨年大分駅最寄りの地区に新築移転され、患者の期待は益々高まるばかりであります。願わくはご健康に留意され、溢れ出るエネルギーを抑え気味にしてその分末永く斯界に貢献されることを祈って止みません。

(平成24年3月28日 記)

注) 平成9年分実施(1月1日～12月31日)の生殖補助医療による出生児の生後発育に関する調査報告 日本受精着床学会雑誌23: 1-18, 2006.

セント・ルカ産婦人科 20周年によせて



日本生殖医学会 理事長
慶應義塾大学医学部産婦人科 教授
吉村 泰典

セント・ルカ産婦人科が創立20周年をお迎えになりましたこと、誠におめでとうございます。宇津宮院長には、日本生殖医学会の会員一同を代表して心よりお慶び申し上げます。長年に亘り、わが国の生殖医療のリーダーとして、九州地区の生殖医学の発展に寄与されたご功績やご貢献に対し、深く畏敬の念を表します。生殖医療専門医である先生方が凍結胚技術の進歩や移植胚数の制限に取り組まれた結果、欧米に比べわが国の多胎妊娠率は極めて低率であり、その進歩は目覚ましいものがあります。これまでのご研鑽やご尽力により、わが国の生殖医療は国民に対して安全で安心な医療を提供することができるようになってきています。

先生とのご交誼は、生殖内分泌学という研究領域が同じであったこともあり、四半世紀前にさかのぼります。まだ先生が九大の温研にお見えになった頃がありました。その後数年して、研究者として尊敬申し上げておりました先生がご開業されると仄聞した時は、正直駭きの念を禁じ得ませんでした。爾来、先生は地域の生殖医療の発展及び普及に専心され、畢生の理想の実現に邁進されてきました。多忙を極める開業の傍ら、研究活動を継

続され、これまでの学会活動には毎回に値するものがあります。私も先生のクリニックで開催されるセント・ルカセミナーにおいて何度も講演させていただき、勉学の機会を与えていただきましたことに対し感謝申し上げます。また、現在厚生科学研修「生殖補助医療により生まれた児の長期予後の検証と生殖補助医療技術の標準化に関する研究」においては、生まれた子どもの長期予後調査の必要性ならびにその重要性を説かれ、中心的な役割を果たしていただいております。先生ならびに職員の皆様に改めて御礼申し上げます。

昨年7月に大分駅前にセント・ルカ産婦人科が新築移転されました、その時先生がおっしゃった言葉が深く脳裏に刻まれています。“私の理想とするクリニックの誕生です”。お互い還暦は疾くに過ぎました。向後は新クリニックにおいても、これまでと同様あらゆる事を忠実かつ着実に遂行されるとは思いますが、ますますご健勝にてご活用されることを心よりお祈りしております。20周年をお迎えになり、それは正しく新たな20周年の始まりです。その前途とも言うべき新生セント・ルカ産婦人科のさらなるご発展をお祈りいたします。





大分大学 名誉教授
宮川 勇生

宇津宮 隆史 先生、「セント・ルカ産婦人科開院20周年」を心からお慶び申し上げます。

先に開業されていた各地の不妊専門医院・病院を見学し、当時の各施設の良いところを総合的に取り入れた不妊専門クリニック「セント・ルカ産婦人科」に、さらに生殖医療研究所を併設して、津守の地に開業されたのが1992年（平成4年）6月3日でした。早いもので20周年を迎えるのですね。

開院当時の「セント・ルカ産婦人科」の施設は、先に見学された各施設の長所と先生の構想が十分活かされていたため、先生は「不妊専門医院として理想のクリニックを開設することができて、満足だ」と言っていました。満足の理由は施設の設計だけでなく、自らの努力によって不妊患者さんのためにすべての医療ができること、さらに先生の生き甲斐である不妊・内分泌学に関する研究ができることにあったと思っています。

先生は一貫して患者さんの立場に立った医療を行ってきました。不妊治療、特に体外受精は患者さんの経済的負担が大きく、その軽減のために大分の政治家に協力を求めて、何度も国会請願を行いました。そして遂に、現在のように不妊治療の補助金が国から、あるいは地域から配布されるようになり、少産少子化対策の大きな援助となっています。また、熱心に治療を受けられたにもかかわらず児を得ることができなかった患者さん方へ、さらに、高齢となり治療を諦めざるを得なかった患者さん方への心のケアにいち早く注目し、不妊心理学に精通した臨床心理士を採用しました。先生がクリスチャンであることによる「優しい心」からの医療行動でしょう。また、倫理面の問題や討議事項が生じた場合の委員長は牧師さんが担当されています。生殖医療は生命倫理が深く関係している分野であることからも、特記すべきことと思えます。さらに、情報、統計を担当する部門があり、毎年

発刊される診療内容やその結果の臨床統計がきわめて正確で、高いレベルにあることも挙げられます。

一方、研究部門では「セント・ルカ産婦人科年報」に記録されているように、これまでに多数の発表や論文が見られます。なかでも、64th Annual Meeting of American Society for Reproductive Medicine (2008年11月, San Francisco, USA) では、数多くのポスター発表の中から優れた5演題のひとつに選ばれ、The Third Prize Poster を受賞したことです。また、最近開催された The International Ovarian Conference 2012 (2012年3月, 東京) でも Poster Award を受賞しています。その他に、第21回日本受精着床学会総会 (2003年1月, 東京) では世界体外受精会議記念賞を、日本哺乳動物卵子学会では学術奨励賞を2004年、2009年、2010年に3回も受賞し、さらに、日本生殖医療心理カウンセリング学会でも優秀ポスター賞を2006年に、優秀演題賞を2009年、2011年に受賞しました。これらの数々の受賞は研究内容のレベルの高さを示しています。

さらに、これまで開院記念行事の「セント・ルカセミナー」には海外、そしてわが国のすばらしい研究者を招待し、医院のスタッフをはじめ私や全国から講演会に参加された先生方の不妊・内分泌学の学問の向上に大きく貢献してきました。

強く記憶に残っている海外からの講演者を列記してみます。

第1回セミナー (1994)

Dr. Brinsden (Bourn Hall Clinic, UK)

第3回セミナー (1996)

Dr. Cha (CHA Health Systems, Korea)

第5回セミナー (1998)

Dr. Pool (Fertility Center of San Antonio, USA)



第6回セミナー（1999）

Dr. Gardner
(Colorado Center for Reproductive Medicine, USA)

第11回セミナー（2004）

Dr. Boivin
(School of Psychology, Cardiff University, UK)

第1回ミニセミナー（2001）

Dr. Keel
(University of Kansas, School of Medicine-Wichita, USA)

Dr. Schalue (Paradox Consultants, USA)

第2回ミニセミナー（2002）

Dr. Malter (St. Barnabas Medical Center, USA)
Dr. Munne (St. Barnabas Medical Center, USA)

など、著名な先生方です。

また、国内の先生方では

品川 信良 先生、鈴木 秋悦 先生、久保 春海 先生、
吉村 泰典 先生、佐藤 英明 先生、星 和彦 先生、
年森 清隆 先生、緒方 勤 先生、久保田健夫先生、
齊藤 英和 先生、柳田 薫 先生、荒木 重雄 先生、
加藤 修 先生、田中 温 先生、高橋 克彦 先生、
森本 義晴 先生、福田 愛作 先生、佐藤 芳昭 先生、
見尾 保幸 先生、斎藤 伸道 先生、有馬 隆博 先生、
寺田 幸弘 先生、阿部 宏之 先生、尾畠 やよい 先生、
吉田 淳 先生、小松 潔 先生、東口 篤司 先生、
荒木 康久 先生、杉野 利久 先生、山縣 一夫 先生、
石井 直恵 先生、向田 哲規 先生、大月 純子 先生、
村瀬嘉代子先生、岡本祐子 先生、平山 史郎 先生、
松本亜樹子先生、荒木 晃子 先生、辻 英美 先生、
石井 慶子 先生

が講演されていますが、まだまだ書き尽くせません。

さらに、先生は努めてスタッフを国内留学、学会、研究会に参加させました。これはスタッフの医療、研究へ

の意欲を高め、レベルが向上し、医院そして研究所の進歩に結びついています。したがって、どの担当分野もすばらしいスタッフで構成されています。

それから、先生はスタッフや関連のある方々との交流も忘れていません。毎年春にはお花見に、また、年末には忘年会に多くの知人を招待しています。定年退職してからの私は常連のひとりになっています。

先生は医療の分野だけでなく、キリスト教会の関係で別府市にある養育者のいない子供たちの施設「社会福祉法人 別府平和園」の理事長も引き受けています。大変なことでしょうが、とても大きな社会貢献をしているのです。

これまで津守の地で、患者さんにとって最良の医療に努めてきた先生にも、ひとつ氣になっていることがあったようです。それは交通の便でした。大分市内の患者さんは自分の車で来院されるのでそれほど問題になりませんが、年々多くなってきた市外や県外から受診される患者さんにとっては、津守は大分駅から少し遠方でした。そのため、経済的にも精神的にも負担になっていたようです。そこで高架式になった新しい大分駅の上野の森口（南口）のすぐ近くに、2011年7月1日生殖医療研究所を併設した「セント・ルカ産婦人科」を新築し、移転しました。手術室の壁には先生の趣味である山や海の美しい写真が投影され、待合室には心を和ませる絵画が飾られた、とてもすばらしい施設です。

これからもうひとつ大きな仕事が待っています。2013年（平成25年）8月8日から2日間、別府ビーコンプラザで開催される第31回日本受精着床学会総会・学術講演会です。学会長として、興味ある内容いっぱいの学術講演会にするために日夜思案中のことでしょう。実りあ



る学術講演会となりますように期待しています。

先生は熊本大学の出身で、私の10年後輩に当たるからでしょうか、九州大学温泉治療学研究所産婦人科に勤務し、日本不妊学会（現 日本生殖医学会）九州支部会や生殖内分泌懇話会などで発表する先生を若い頃から知っていました。また、1988年（昭和63年）10月、私が大分医科大学（現 大分大学医学部）に着任当時から懇意にしてきた先生が、このように世界の不妊・受精着床の分野

をリードする活躍をしていることはとてもうれしいことです。

これからも先生の持ち前のアクティビティー、バイタリティーで益々活躍され、発展されることを心から期待しています。

（2012年3月31日 記す）



フィレンツェ（イタリア）

セント・ルカ産婦人科 20周年によせて



セント・ルカ産婦人科では、ミーティングの際に毎月1回約1時間の「聖書の学び」が行われています。「聖書の学び」は開院5年目から始まり、2012年4月には157回目を迎えるました。宇津宮院長の所属する教会の牧師がこれを担当し、3代目の牧師としてわたしが担当したものでもすでに100回に近づこうとしています。毎回適宜、聖書の箇所を選んで解説をしながらお話しさせていただき、そのあと職員の皆さんから感想を聞かせていただいている。時には感想を交えた対話になることもあります。

生殖補助医療の現場で聖書の学びがなされているのは珍しいことかもしれません。生殖補助医療の世界と聖書の世界は、一見するとあまりにもかけ離れているように思われるからです。しかし、そうではありません。開院15周年の記念誌でも触れましたが、聖書には不妊の夫婦の例がいくつも出てくるのです。たとえば旧約聖書の創世記では3代にわたる不妊の夫婦が取り上げられており、そこには親や夫婦の偏愛、代理母、兄弟の確執などの問題が包み隠さず記されています。一言でいえば、聖書に登場する人間の多くは立派な人物ではありません。人間としての弱さや未熟さ、苦悩や過ちの多さが正直に描かれ、そんな人間に神が語りかけている、それが聖書であるといってよいでしょう。

ですから「聖書の学び」では、そのテーマがLIFEを中心とする内容になる傾向があります。つまり、いのち、生きる力、人生、生活といったものです。これを職員自身や家族について考えるだけでなく、患者さんをはじめとする他者へのかかわりを絶えず念頭に置きながら学ぶことを心がけています。人のいのちや人生にかかる現実だからこそ、高い倫理観や人間観、またしっかりした人生観の構築のために、これらの学びが必要不可欠であると考えています。欲張りかもしれませんのが、高い倫理観や人間観が薄れてきている日本社会で、それらを体現

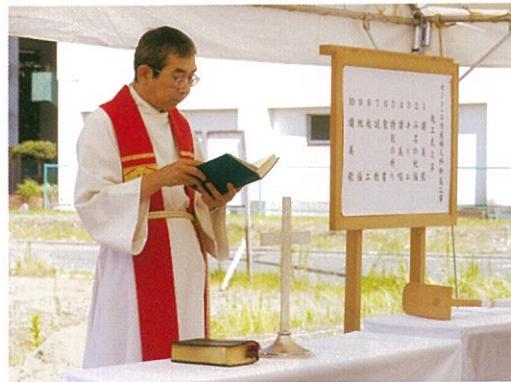
日本福音ルーテル大分教会 牧師
セント・ルカ産婦人科倫理委員会 委員長
野村 陽一

できる一人になってほしいという願いも持っています。

これまで100回近く「聖書の学び」を担当してきた中で、毎回の聖書箇所は社会的事象に合わせて選択する場合もありますが、多くはセント・ルカの皆さんとこの箇所について一緒に考えてみようとの思いで選択してきました。月1回だけの訪問ですので、今、現場がどんな状況かを知らないまま選択しています。それにもかかわらず、時宜にかなった聖書の箇所であったことがこれまで何度もなくありました。わたしの話がそうさせるのではなく、聖書の言葉そのものが持つ力がそうさせるのです。これは牧師冥利に尽きることで、わたしだけに与えられる大いに励まされる喜びです。ですから、「聖書の学び」はわたしにとってまさに楽しみな時間なのです。感謝しています。

セント・ルカ産婦人科では、院内倫理委員会の委員長も仰せつかっています。最初の倫理委員会では、精子のゲノムインプリント、胚の酸素呼吸量測定が審議事項であり、まったく専門外の課題、しかも最先端の課題に理解がついていなかった、目を白黒させていました。遺伝子や染色体レベルの話に、高校時代の生物の授業に戻ったかのような気分でした。当初は極端な専門性に引きずられて、判断の軸足を置く位置に苦労しました。結局は、セント・ルカの倫理委員会の枠組みを超えて、時代の最先端にどう向き合うかの回答を求められているのであり、「聖書の学び」で目指している高い倫理観や人間観が今こそ自分に対して問われていると考えざるを得ず、その立ち位置で忠実に判断してきたつもりです。

倫理委員会ではその後、着床前診断（以下PGD）が重要な課題となり、今もそれは続いている。PGDの問題は、倫理委員会が新たな時代に思い切って一歩踏み出すような課題でした。その1例目である、染色体の転座を有する症例の審議の際、1ヵ月間ほど両肩にどっ



しりと重いものを載せたように悩み抜いたのを覚えています。

PGDに関する最初の議論はPGDを命の選別の機会としないことを第一とすることでした。本院のデータで流産率の高い染色体異常の染色体番号が示され、その中に21番が含まれていましたが、倫理委員会は流産率が高くても生存率のある染色体異常はPGDされてはならないとしました。つまり生存率ゼロの染色体異常のみPGDするべきだとしたのです。また、男女産み分けにつながるXY染色体もPGDされてはならないとしました。そして、日本産科婦人科学会の会告に基づいて厳格に以下のような承認条件を設定しました。

1. 染色体の転座を有するクライアント夫婦の明確な意志
2. 十分な説明と納得
3. 2回以上の流産経験
4. 院内カウンセリングの実施とその報告
5. 遺伝カウンセリングの実施とその報告
6. PGDに際して染色体の21,X,Yを診断しない
7. 症例ごとの個別審査

しかし、その後、倫理委員会に審議要請されるものに、染色体の転座は有しないが流産を繰り返す症例、高齢化

により胚の染色体異常が容易に考えられる症例、長期にわたる不妊治療にもかかわらず妊娠しない症例などが加わってきました。それらは、PGDの必要性を感じつとも従来の条件には合致せず、承認が困難なものばかりでした。それも増加傾向にあります。現場では明らかに新たな基準が必要とされてきているのを感じます。

倫理委員会は現場の要請に応えなければなりません。今後の議論と導き出される判断はさらに一歩踏み出す性格のものですから、日本産科婦人科学会の承認を必要とすることになるでしょう。PGDの適応条件の見直しをするにしても、安易にPGDが実施されることはなりません。現状では、たとえばクライアントに2回以上の流産を経験させるのかといった非人道的ともいえる条件をどうするかの急ぐべき課題があります。流産率低下をはかるためにPGDによる致死的染色体異常を持たない良好な胚の選別も課題でしょう。また不妊治療の最終手段としてのPGDは、治療終結を決断する機会となることも考えられるでしょう。今後も、流産率が急上昇する年齢、流産に占める染色体異常の割合、染色体異常が急増する年齢、妊娠に至る平均治療期間等のデータを本院に求めながら、倫理委員会で慎重に議論を進め、日本産科婦人科学会に提案し、早期の新基準策定を実現できればと願っています。

セント・ルカ産婦人科 20周年によせて



大分大学医学部産科婦人科 教授
檣原 久司

この度、セント・ルカ産婦人科20周年をお迎えになるとのこと、誠におめでとうございます。また、これから華々しく発展を遂げる大分駅上野の森口（南口）から徒歩2分の位置に新築移転し、患者さんにとっても理想的な立地であり、貴院の輝かしい未来が期待されます。

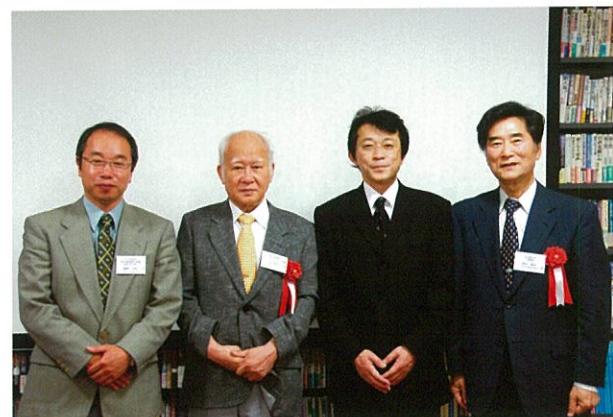
この20年間、貴院の診療・研究とともに、私ども大分大学医学部 産科婦人科学教室は歩ませていただきました（院長先生の娘さん2人が当科に入局してくださり、立派に成長しておられます）。また、その間、多くのご指導と活力をいただきましたが、これはセント・ルカ産婦人科の院長先生を始め、皆様の情熱とアクティビティーの高さによるものです。セント・ルカセミナーでは、碩学の大家とともに新進気鋭の研究者を常に呼ばれ、大分に居ながらにして本当に貴重な講演を聴ける幸せを何度味あわせていただいたかわかりません。臨床に大切な新しい研究分野への院長先生の嗅覚に感嘆するばかりです。

昨今の高度生殖補助医療（ART）の現状を考えますと、晩婚化や晩産化により、不妊治療を受ける患者さんが急激に高齢化してきました。この高齢化は、患者さん側にとっても、医療者側から見ても、妊娠にくくなるばかりでなく、様々な問題が生じ、益々深い配慮が必要な状況になりつつあります。貴院は、これらの問題に非常に視野の広いスタンスで当初から取り組んできました。生殖年齢としては高齢の方達をいかに妊娠に導くかなど、きめの細かい不妊治療・ARTを行い、すばらしい治療成績を挙げておられます。

特筆すべきは、早くから保険適用・助成金について署名運動を展開し、国会請願を行い、今でこそ全国的になった不妊治療への助成に大きな役割を果たしたことです。経済的な負担が少しでも軽くなることで、どれほど多くの患者さんが心身ともにつらい治療を乗り越えられたことでしょう。また、先生は生殖補助医療で生まれた

子の心身の健康に対して高い問題意識をお持ちであり、現在進行中の厚生労働省の科学研究費による生殖医療で生まれた子供3,000人の15歳までの健康（長期予後）調査に期待されています。さらに先生は、非配偶者間人工授精（AID）などで出生された児の出自を知る権利やその後の心のケアに深い関心を持つなど、今後も、社会貢献を果たされることと拝察いたします。

思いつくままに述べ、20周年のお祝いに寄稿させていただきました。セント・ルカ産婦人科にはこの紙面にてまったく言い尽くせぬほどすばらしい面がたくさんあります。今後も、院長先生を中心として、「医療の安全性、確実性、正確性を保障し、患者さんも、またその子供も安心して医療を受けられる環境が整うこと」を不斷に目指されることでしょう。「患者さんとその医療・技術で生まれてくる子の本当の幸せ」を目的とした治療やご配慮を完遂なさることを心からお祈りして、私からのお祝いの拙文とさせていただきます。





タヒチ